クリアランスギャップを用いたアクセス管理への取り組み

東京女子医科大学　臨床工学部[1]、臨床工学科[2]、血液浄化療法科[3]、腎臓外科[4]
〇若山　功治[1]、横手　卓也[1]、村上　淳[1]、金子　岩和[1]、木全　直樹[3]、廣谷　紗千子[4]、峰島　三千男[2]、秋葉　隆[3]

【目的】クリアランスギャップ（CL-Gap）は、Kt/V 実測値から推定される有効クリアランスと血液流量およびダイアライザーの尿素除去性能から算出されるクリアランス理論値との格差から、処方された治療効率と実際の治療効率のギャップを推定する手法である。また、この格差の動向から、対象患者のアクセスの再循環や狭窄を感度良く検知可能なモニタリング法であり、アクセス管理の指標の一つとして有用であると報告されている。
　今回我々は、当院において CL-Gap 値を測定し、アクセス管理における CL-Gap 値の有用性について検討したので報告する。

【対象および方法】対象は、当院外来維持透析患者 88 名とし、患者データを CL-Gap 算出プログラムに入力して、CL-Gap 値を算出し検討した。

【結果】CL-Gap 値を算出した結果、患者 88 人中 9 人(10.2%)の患者が CL-Gap 値 10%を超えていた。

【考察】CL-Gap は患者情報・治療条件・採血データなどから簡便に算出可能であり、その値から脱血不良や再循環などのアクセストラブルが疑われる症例を選別できる可能性がある。しかし、CL-Gap 値に依存する因子がアクセス関連以外にも考えられるため、今後、これらを加味した検討を行う必要があると思われた。

【結語】アクセス管理において CL-Gap は、全症例を対象としたスクリーニング検査としてアクセスの機能不全が疑われる症例を選別することが可能であり、ここで選別された患者の VA 流量や再循環率の測定などを施行することで、より確実なアクセス管理が実現できると考えられた。